

# 子どものつぐやきが意味するもの

小山 節子

現職を退き幼稚園新規採用教員の研修指導員として私が体験し、気付かされたことは少なくともなかった。その中で子どもの行動は常に新鮮であり興味深いものであったのは言うまでもない。

クラスに入る際、子ども達のどうして来たのかの素朴な疑問に戸惑いながらも咄嗟に元氣な皆と遊びたいと応えたのはあまり的確ではなかった。月に一回の訪問では遊び仲間になれないのはあたりまえで

ある。それでも子どもは優しい。食事時になると数人が競って声をかけてくれ私の座席が決められる。

友達や周囲に自ら溶け込めない子どもがほっと安心する瞬間を私自身が味わった気分にはさせられたのであるから不思議である。保育の場ではよく「子どもの目線で」とか「子どもと共感する」と言うが子どもの一員になったつもりで実体験できる機会を与えられたことは有り難い。

ある幼稚園の五歳児、昼食時で担任と当番は給食室へ行っている。私の隣のW子が少し離れたグループのM子に、ナプキンや箸箱を触らないで手を膝にして待たないといけないと何回か指図したらM子は泣き出した。するとそのグループの女兒四人がM子を含めテーブル上で握手し、W子とは遊ばないと密かに誓いあっている。Y子は「そんなに言わなくてもいいんじゃないの。友達なんだから」ときっぱり言い切る。W子は表情をこわ張らせ、だめって決めているの（担任との約束）とひかない。私はやや心配になりグループに近付き理由を聞いた。

「遊びにいられてあげないって決めたの。私（Y子）もW子ちゃんにいじめられたけれど私はいじめたことがないの。私も泣きたくなかったけれど我慢したの。先生（担任）に言うといじめられる。先生（小山）、W子ちゃんに言うておいてね」。

私はそれまでもW子の言動が気にかかった事もあってW子にこの際伝えようと思った。五人が悲し

んでいること、優しく教えてあげると良かったこと、強く言うてごめんねって言ったら？ 等。

すると、小さな声でW子「私だって、強く言われる、ママに。ママは頭も叩く」、私はすぐかける言葉に窮した。当惑した私が叩くところはおりこうさんの頭じゃなくてお尻よね、等と言ったものだからW子やグループの男児たちが笑い出し、突然、空気が軽くなった。間もなく給食が配膳され始め、ふと注意して見るとW子はY子やM子達と行き交いながら「ごめんね」と言っている。

私は無理やり謝らせようと強引ではなかったか、解決を子どもに委ねるべきではなかったか、なりゆ



きをもう少し見守っていたらどうであったか、担任だったらどうしたであろうか、等自問自答し始めた自分に気付いたがもう遅い。全く試行錯誤の境地である。

十分にも満たない間の出来事であったが、私の心にかかったのはW子に対する母親のかかわり方に問題はないかという点である。子どもの言葉をそのまま鵜呑みにして、日常的に行われているかのように錯覚し決め付けることは避けなければならないが、事実を語っている場合もあるからである。このことは当然担任に話した上で、より一層観察していった欲しいものと願った。

それにしても、ランチタイムのリラックスした雰囲気の中で表してくれる子どももの会話には真実味が含まれ興味深い。食事しながらであるから、傍らに私がいようと気にせず自由におしゃべりを楽しんでいる。つかの間ではあるが私も仲間の一員に加えさ

せてもらっている喜びに浸る。わたしは……あのね……と話を聞いてもらうことがなんと嬉しく楽しいひとときであろう。

話題は父母や家族の事、飼っている小動物について等無論遊びを含め多様性に富んでいる。

そこには生活臭が滲み出ることもあり、さながら大人の井戸端会議の様相を呈していたりする。

子どものすばらしいところは友達の話に耳を傾け、ありのままを受入れ、難しく追及しない点にあると言える。

こんなにささやかな瞬間からも、私たちは子どもをとりまく様々な状況を知る事によって幼児理解を深める手掛かりを得て、保育の方向を見いだせるかもしれないと考える。

(茨城県在住)